

# ユートピアの途 — 抄

M.ブーバー著 (1950年) 長谷川進訳

理想社 初版 1969(昭和 44)年 (改訳第 2 版 1983(昭和 58)年)

マルティン・ブーバー (ヘブライ語: מרטין בובר, ラテン文字転写; Martin Buber, 1878年2月8日 - 1965年6月13日) はオーストリア出身のユダヤ系宗教哲学者、社会学者。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

## 目次

1 概念——(社会の構造的更新の理念).....	1
2. 事実——(社会主義におけるユートピア的要素).....	1
3. 先駆者たち .....	4
4. プルードン .....	4
5. クロポトキン.....	5
6. ランダウアー.....	7
7. 実験 .....	10
8. マルクスと社会の更新 .....	12
9. レーニンと社会の更新 .....	13
10. もう一つの実験.....	16
11. 世界危機のさ中で.....	20

二十一世紀は、二十世紀以上に先端科学兵器による戦争で開幕した。世界中の人々は、二十一世紀を“平和の世紀に”とあれほど期待したのに。

このような時に、ハイデッカーに並んで二十世紀最高の哲学者とされるユダヤ人哲学者 M・ブーバーの遺した言葉は、近代人への愛と平和の具現を期待させるメッセージを私たちに与えてくれるものと信じる。(聖路加国際病院理事長 日野原重明)

出典: 『ブーバーに学ぶ』 斉藤啓一 日本教文社 2003(平成 15)年 「推薦の言葉」

注) 引用文の傍点は執筆者(訳者)による。下線および太字はこの抄の作成者による。

抄作成 2021(令和3)年9月 和智章宏

版 1.0	2021年9月11日	初版
版 1.1	2021年10月16日	誤字脱字修正
版 1.2	2021年10月31日	下線部、太字部更新
版 1.3	2022年1月5日	太字フォント修正
版 1.4	2022年3月9日	誤字脱字修正 行間隔修正

## 1 概念——(社会の構造的更新の理念)

「私たちが自分の力をまだためして見ないことを空想的と呼ぶのはなんの益もない。」(ブーバー) p.14

しかし社会主義が迷いこんでしまった袋小路から抜け出るためには、何よりも「ユートピア的」という合言葉をその真の意味内容について吟味しなければならない。 p.14

## 2. 事実——(社会主義におけるユートピア的要素)

その幻想は、ふらふらさまよっているものでもなければ、変わり易い感興のままにあてどなくゆり動いているものでもない。それは**第一義的かつ本源的なあるもの**に構造的にしっかりと**中心**をおき、これを建設することをもって自らの課題とすべきところのものであって、この第一義的なものとは**願望**である。ユートピア的像は「あるべき」ところのものについての像であり、こうした像を描くものはそれが存在することを願望するものなのである。 p.15

精神史上における像形成のユートピア的願望は、(中略)魂と親しく通じながらもそれに制約されはしない超人的なあるものと結合している。そこに働いているのは、宗教的または哲学的想念において、啓示または理念として体験され、そして本質上、個々人のうちではなく、<sup>グマインシャフト</sup>人間的共同社会(共同体)自体のうちにおいてのみ実現されうるところの、かの正しきものへの渴望なのである。 p.15 - p.16

不条理な秩序について抱く苦悩が下地となって、こうした想念を魂に生み、魂がこの想念から受けとるものが、倒錯した物事の背理にたいする洞察を強めかつ深める。**想念されたものの実現への渴望**こそは、かのユートピア像を形成するのである。 p.16

終末論は創造の完成を意味し、ユートピアは、人々の共同生活のうちに宿る「正しい」秩序の可能性の展開を意味する。 p.16

終末論にとっては(中略)決定的な働きは天上(神)から生起する。ユートピアにとっては、すべてが**自覚せる人間意志**によって支配される。それどころか、まさしくユートピアは、あたかも自覚せる人間意志以外のいかなる要因もそこには存在しないかのように考えらえる社会像として特徴づけられることができる。 p.17

終末論は**預言者的**である限り、ユートピアは**哲学的**である限り、現実主義的な性格をもつのである。 p.17

啓蒙時代とそれにつづいて起こった出来事は、宗教的終末論からその活動領域をいよいよ多く奪い去った。十世代のうちに、将来のある時点において天上からの働きが人間を救済し、不調和なものから調和のあるものに変えるであろうと信ずることは、人間にとってますます困難となった。 p.17

近代の社会主義および共産主義の社会体系は、終末論と同様に告知ないし呼びかけの性格を帯びている。 p.18

**終末論**には、さきにもほのめかしたように、二つの基本的形態が存在するのである。 p.20

- ◆ 呼びかけられた一人一人の人間の決断力に、あらゆる瞬間にまた確定すべくもない度合いにおいて贖罪を用意させるところの**預言者の形態**（イスラエルに由来）
- ◆ 贖罪の過程がその瞬間および経過のあらゆる詳細にわたって太古から決定されており、よし不動に確定されている事柄が人間にあらかじめ「打ち明けられ」啓示されるにしても、人間はそれを成就するためにただ道具として用いられるにとどまり、人びとにそれぞれの職能が指示されているところの**黙示録的形態**（イランに由来）

すなわち預言者の基本形態は所謂ユートピストの体系のいくつかのうちに、黙示録的基本形態はとりわけマルクス主義のうちに。 p.20

いわゆるユートピストたちのユートピアは革命前的であり、マルクス主義者のユートピアは革命後的である。 p.21

第二の要素（**有機的計画**）はこれ(図式的虚構)と全く異なる、いな正反対の性質のものである。ここでは、われわれの社会秩序の本質を構成するもろもろの矛盾を克服するため、現在の人間と現在の事態とについてのとらわれない、非独断的な認識から出発して、これらの両者の変改を開始しようという意図が働いている。この精神的傾向は、無条件に現在の社会状況の事実に出発点を取りながら、いかなる独断的気まぐれにも惑わされない透徹した眼をもって、まさしくかの改変を目指すところの、現実の深みのうちにいまもかくされ、他の顕著な力強い傾向によってなお不分明にされている諸々の傾向に着目するのである。あらゆる計画的な知性は積極的な意味においてユートピア的であると正当にも言われた。さらにここでの社会主義的「ユートピスト」の計画的知性は、あらゆる時代に認めることのできるもろもろの発展傾向の多様性、その相反性をも逐一知り、あるいは少なくともそれに気づくことにおいて、現に支配的な諸傾向を洞察しながらそれらにかくされた他の諸傾向を見落とすことなく、まさにそれらの傾向こそは現存社会の矛盾を真に克服するであろうような秩序を目ざしているかどうか、またどの範囲にまでそうであるかを問うことにおいて、まさしくその**積極的ユートピア主義**を確証しているのである。 p.23

いわゆるユートピア社会主義が発展して行くうちに、その指導的な代表者たちの間には、社会的問題の立て方にしてもその解決にしても、一つの公分母に還元され得ないこと、あらゆる単純化が、精神的には極めて意味のあるものでも、認識と行動とに共に不利な影響を与えるという確信がいよいよ強くなった。 p.24

「ユートピア的」な非マルクス主義的社会主義は、目標と同じ性質の手段をとろうとする。それは、将来の「飛躍」を当てにして、追及することとは逆のことを準備しなければならないと信ずることを拒否

する。それはむしろ、追及する事柄にとっていまここで現在可能な場所をつくりだし、かくしてそれがのちに実現されるようにしなければならないと信ずる。それは革命後の飛躍を信ぜず、**革命的連続**を、もっと正確に言えば、革命とはその内部で既に可能な限度にまで発展している**現実の成熟、解放および拡大**を意味するにすぎないような**連続**を信ずるのである。 p.25 – p.26

われわれは、社会主義が発生した**資本主義社会**をその社会として性格を検討するとき、それが**構造的に貧困**な、しかもいよいよ貧困になりつつある社会であることを知る。 p.26

社会の構造とは社会の内容、共同体的な内容の意味に理解すべきである。社会は、**真の諸社会、すなわち地域のおよび仕事の共同体**とその**順次的連合**から構成される度合いに応じて、構造的に豊かであるといえることができる。 p.26

このような社会の構造では、それをどの個所でしらべようとも、われわれはいたるところに「社会」という細胞組織、すなわち**生きた協力の存在**、広範囲に自律的な、内面から自己を形成し変形して行く人びとの**共同生活**を見出すのである。社会はまさにその本質からして分離せる個々人からではなく、**結合単位**とそれら単位の**連合**とからなるのである。 p.26

このような社会の本質は、**資本主義経済**とその**国家**との強圧によってますます空洞化され、かくして近代の個人化の過程は**原子化の過程**として完成した。それと共に、古くからの有機的諸形態の多くは、外面的には存在を保ちながらも、意義と精神においては空虚となり、衰頹してゆく組織となった。たんに人々が**大衆**とよびなれているものだけでなく、社会全体が本質的に無定形、無分節であり、**構造的に貧困**なのである。 p.26 – p.27

これにたいしては、経済的または、精神的関心の合致から生まれるもろもろの団結、その最も有力なのは**政党**であるが、これらとても助けにならない。

「社会」をしてそれ自体一つの矛盾たらしめるこのような状態に直面して、「ユートピア」社会主義者たちは、いよいよもって、**社会の構造的更新**を追求した。——それは、(中略)むしろあらゆる経済的および社会的生成の深みに認められる**分散主義的な反対傾向**と結びつき、また**人間精神の内奥に、徐々に成長しつつある最も内面的な反抗、大衆化的もしくは集団化的孤独**にたいする**反抗**とも結びついていることなのである。 p.27

ヴィクトル・ユーゴーはユートピアを「明日の真理」と呼んだ。ユートピア的社会主義と呼ばれ、一見時代おくれなもののように宣伝された精神の努力こそは、おそらく将来の社会構造を準備するであろう。 p.27 – p.28

「ユートピア」社会主義こそは、**社会の構造的更新**の埒内で、時々可能な最大限の**共同社会的自治**を獲得するために闘うのである。 p.28

人間対人間の現実の共同生活は、人々がその共同生活に関する実際の物事をともに経験し、協議し、管理するところ、現実の近隣関係、現実の作業組合が存在するところでのみ、発展することができる。(中略)われわれは全く非ロマンチックに、全く現在に生きながら、われわれの歴史的時代の**反抗的な材料**をもって**真の共同社会**を建設しなければならない。(1928 ブーバー) p.28 - p.29

### 3. 先駆者たち

#### オウエン

「共同社会的な生活とは」とテンニースは、「共同社会」すなわち人びとの「**永続的な真の共同生活**」の歴史的形態について語っている、「**相互的な所有と享受、共有財産の所有と享受**」である。 p.38

「相互的な所有と享受」すなわち**成員相互の相応した協力**と呼んだものが成立するのである。まさにこの考えこそはオウエンの計画の基礎をなすものである。 p.38 - p.39

「人間が個別化されたままである間は」すなわち**社会が個々人の間の真の関係から構成されない間は、いまの状態が続かざるをえない**。変化は、社会全体にわたって行われる前に、計画された**共同体的農村**の一つ一つにおいて成就されるであろう。 p.39 - p.40

オウエンの解答は社会の変改はその一つ一つの細胞並びに全体の構造について遂行されなければならないこと、個々の単位の正しい秩序のみが正しい**全体の秩序**を確立しうることを語っている。これこそは**社会主義の建設**なのである。 p.41

### 4. プルードン

「すべての観念が(中略)もし人々がそれを排他的絶対的な意味にとるときは、あるいはこうした意味に心を奪われるときは、誤謬であり、すなわち矛盾しており、不合理である。」 p.45

彼は、誤れる**絶対的信仰、宿命の支配**からの解放にこそ人類本来の進路を認めている。 p.45

「人間はもはや機械化されることを欲しない。人間の努力は**宿命からの脱却**を目指している。」 p.45

プルードンの根本思想が何ら個人主義的ではないことはここでもすでに明白である。彼が国家に対立させているのは個人そのものではなくその集団、個人の自発的結合としての**集団との有機的関連**における**個人**である。 p.48

「**自然的諸集団**を維持することこそは」、とプルードンは1863年に書いている、「**選挙権行使**にとって最も重要である。これこそは投票の**本質的前提条件**である。それなくしては投票に何らの本源性も、何らの公明さも、はっきり表明されたいかなる意味も存在しない。・・・選挙活動における**自発的集団**の破壊は、民族そのものの道徳的破壊であり、革命の思想の否定であろう。」 p.50

こうした点から、マルクスが、プルードンは「革命運動を理解する」能力がないと知っている理由が理解できるように、プルードンがマルクスを「社会主義の条虫」と呼んだ理由も理解できるのである。

p.53

社会再組織の考えから**構造的更新**の考えに進むことによって、プルードンは決定的な一步を踏み出した。「産業制度」は新しい構造を意味しないが、「**連合主義**」はそれを意味するのである。p.54 – p.55

社会の生活は個人の集団への、集団の連合への**結合**において営まれる。 p.55

「あたかも多くの人々が、彼らの努力をともにすることによって、質においても強さにおいても各自の力の総和にまさる集合力を生み出すと同じように、相互に交換関係のうちにもち来される多数の仕事場は、より高次の活力を生み出すであろう。」(社会力) p.55 – p.56

「・・・**中央集権的体制**は大きさ、単純さおよび発展についてはすこぶるりっぱである。それにはただ一つのことを欠けている。すなわちこの体制において人間はもはや彼自身のものではない。そこでは彼は自分を感じることがなく、生きてもいないし、考慮されてもいない。」 p.56 – p.57

「中央集権化の熱病が」と彼は 1861 年に書いている、「世界に蔓延している。人びとは、彼らになお残る自由に飽き、ただそれを失うことを望んでいるといってよいであろう。・・・いたるところで見られるのは、権威への欲求、独立への倦怠なのか、それともたんに自治の無能力なのか。」 p.58

人間精神のこの重い疾病にたいしては、人間の内奥に働く**建設的、構造更新的諸力**のみが救治することができる。これを表現したのが、1863 年のある政治的著作の結論でプルードンが述べているところの「**理念**」である。 p.58

「この理念は発生し、すでに流布している。」しかしそれを実現すべき勢力を獲得するためには、それは「**事態の内部から**生起****」しなければならない。 p.58

プルードンは「上から」来る一切のもの、民衆に強制されるもの、特権で飾られるものに対して深い嫌悪の念をいだいた。これに関連して新たな**集団的エゴイズム**の蔓延を恐れた。なぜなら集団的エゴイズムは個人的エゴイズムよりも危険なものと思われたからである。 p.61

## 5. クロポトキン

確かにクロポトキンの国家概念は狭きに失している。中央集権的国家を国家一般と同一視することはできない。歴史上、小さな諸結社の固有のあり方を抑圧するかすがいとしての国家だけが存在するのではない。さらにそれら結社がその中で結合する枠としての国家も存在するのである。 p.66

「緊密に集中化され、人知の最高の浪費を用意し、配電盤の一握りで操作できる命令機構」(全体主義の多彩な代弁者カール・シュミットはリヴァイアサンをこう名づける)に対しては、有機体的な何ものも対抗することができない。 p.67

中央集権主義を擁護する一切の教説を論難せざるをえない者には、個々人の安全——この目的のためにリヴァイアサンは不可欠とみなされる——ではなく共同社会的実質の維持、人類における共同体生活の更新が最も重要事である。 p.67

個々人や諸集団の間の対立は、たしかに決してなくならないであろうし、またなくなるべきでもあるまい。ただそれらの対立は調整されなければならない。しかしわれわれは、個々の争いが係り合いのない大きな全体社会にまで拡大したり、あるいは中央集権的、無制限的支配の確立に利用されたりすることのない状態を目ざして努力することができるし、また努力しなければならないのである。 p.68

だが歴史は、「これら闘争こそは自由都市における自由な生活の保証そのものであった」こと、共同社会はこれら闘争を通して成長し若返りしたことを示している。 p.68

クロポトキンは、すでにブルードンが示唆したことであるが、社会主義的自治共同体はコミュニケーションの二重の結合、すなわち様々に交錯し、相互に支持しあう地域的自治体の連合と職業的共同体の連合とを基礎としてのみ達成されることをより明確に理解した。 p.70

「われわれは」と彼は自叙伝に書いている、「文明諸国において、古い社会形態にとって代わるべき新しい社会形態の芽生えに気づいた。・・・これらの集団のすべては相互的協定によってその努力を一つにするであろう・・・個人的発意が奨励され、画一および集中化へのあらゆる傾向が防止されるだろう。その上、この社会は一定不動の形態に硬化することなく、不斷に変化していくであろう。なぜなら、それは絶えず成長する生きた有機体であろうからである。」 p.71

ここでわれわれは、クロポトキンが攻撃しているのは結局国家秩序そのものではなく、現在のあらゆる形態の国家秩序だけであること、彼の「アナキー」はブルードンのそれと同じく実際は無<sup>アクラシー</sup>支配であり、無政府ではなく無支配であることをとくにはっきり知るのである。 p.73

革命の悲劇とは、その積極的な目標を基にして考察するならば、達成しようとするものが革命前すでにある度合いにまで予め形成されており、したがって革命行動がたんにそれに十分な発展の場所を獲得するだけであるのではないときには、またその理由で、革命は、正に最も誠実な最も情熱的な革命家たちが持ちきたそうと望んだものとは正反対の結果になるということである。 p.74

クロポトキンはバクーニンと同じように、次の基本的事実、革命は、政治的領域におけるとは反対に社会的領域においては、なんら創造的な勢力ではなく、むしろたんに開放的、救出的な、また助力的な勢力をもつこと、すなわち革命は、革命前の社会の胎内においてすでに予め形成されたものを仕上げし、

自由にし、強力にし、完全なものにすることができるだけであること、社会的生成について見れば、革命のときは受胎のとき——これが予め行われるとして——ではなく、出産のときであることを見のがしている。 p.75

## 6. ランダウアー

クロポトキンを越えるランダウアーの歩みは、まず第一に**国家の本質**に対するその率直な洞察に存する。 p.77

「国家は一つの関係、人びとの間のある関係、人びとが互いにとる態度のある様式である。人は国家を破壊するには、いまと別の関係に入ることにより、互いにいまと別の態度をとることによってである。」 p.77

人びとは現在互いに「国家的」関係、すなわち**国家の強制秩序**を必要とし、またそこに表現されているところの関係に立っている。したがってこの**強制秩序**は、ただ人びとの間のこの関係が別の関係にとって代えられる度合いに応じてのみ克服されることができる。 p.77

この別の関係をランダウアーは「<sup>フォルク</sup>民衆」と呼んでいる。これは人びとの間に実際に存在するが、しかしまだ団結や連合ではなく、まだより高次の有機体になっていない結合体である。 p.77

・・・今までは個々の、原子化された人びとの精神と願望のうちにはしか生きていない**社会主義**が現実となる。——それは国家の内部においてではなく「外部で、国家の外において」すなわち、まず国家の傍で行われる。 p.77 – p.78

「**社会主義**は、新奇なものの案出ではなく、現に存在するもの、すでに成長しているものの発見であることを人はいつかは知るであろう。」 p.78

それ故社会主義は、十分な数の人びとがそれを欲するならばあらゆる時代の実現可能である。(中略)それは、人びとに、**人びとの精神**にかかっている。 p.78

「国家」は一つの<sup>ステータス</sup>状態である。一定の時期に一定の場所で生活を共にする人びとは、ただある程度までは自発的に相互に正しい生活を営み、自発的にただしい秩序を守り、自発的に共同の業務を処理することができる。この能力を**時々**に**限定する線**が国家のその時々**の基礎**である。別の言葉でいえば**自発的に正しい秩序をつくる時々**の無能力が、**正当的な強制の度合**を決定する。 p.79

「原理上」の国家と事実上の国家とのこの時々**の違い**を私は**過剰国家**と呼んでいるが、この違いは、**集積された権力は強要されない限り退かない**という歴史的事実によって説明される。 p.79

権力の原理的土台は腐朽するが、権力自体はそれを強制されない限り枯死しない。 p.79

すなわち社会の構造的更新を念とする人びとにとって起こる課題は、国家の事実上の基線を原理上の基線にまで押しもどすことである。しかしこれは、真の有機的な構造の形成と更新、人間個人及び家族の様々な共同体<sup>ゲマインデ</sup>への、また諸々の共同体の連合体への結合を通して生起することである。このような発展こそは、そしてこれのみが国家を排除することによって国家を「破壊する。」もちろんそれは、つねにその時々に無用な、根拠を失った国家の部分のみについてのことである。 p.80

国家と並んで共同社会が、すなわち「孤立した原子的個人の総和ではなく、様々の集団から一つのアーチへのように自己を拡大しようとしている有機的な共属性」が存在している。しかしこの共同体的現実は眠りから目覚まされ、それが国家の殻の下に潜んでいる深みから呼び出されなければならない。 p.80

このことは、人間の殻たる内心の国家化が打ち破られ、その下で根源的現実の上にまどろんでいるものが目覚まされることによる以外には起りえない。「これが社会主義者の任務であり、また彼らによって呼び寄せられ、引き起こされる民衆運動の課題である。すなわち硬化した心情をときほぐし、それによって埋もれていたものが再び表面に現われ出て、真に生きたものであるのにいまは全く死んだように見えるものが再び姿を現わし、若しくは成長するようにすることである。」 p.81

このようにして更新した人びとこそ社会を更新することができる。そして彼らは、彼らの精神に新しいものとして知らされたのが、太古以来の共同社会的要素であることを体得したので、真の共同社会的形態を保ってきたすべてのものを新たな建設のうちに組み入れるであろう。 p.80-p.81

気儘にまた無駄にではなく、正当にそして将来のために建設する者は、自分に委ねられ、自分を力づけるところの古い伝統と内的に相結合しながら行動する。 p.81

「この相似性、不同のなかでのこの平等、同じ民族を結びつける特質、この共同の精神こそは確かな事実である。君たち、自由な人びとや社会主義者はこの事実を見のがしてはなるまい。社会主義、自由及び正義はただ、古くから共属してきた人びとの間で達成されるはずである。また社会主義は抽象的に建設されるのではなく、人びとの間の調和に応じて具体的な多様さのうちに建設されるであろう。」ここに民族と社会主義との真の結合が見出される。 p.82

「共同体精神<sup>ゲマインデ</sup>による民衆の再生のみが救いをもたらすことができる。」 p.82

社会主義者であることは、時代のすべての共同精神および共同社会的生活と生きた関係を結び、非共同社会的な現在の奥底になお潜むそれらの痕跡を、目覚めた、とらわれない眼をもって探求し、またこれが可能なところではどこでも、新しい形態において企画したことを、強固な紐帯で永続的なものに結びつけることを意味する。 p.83

だがそれ(社会主義者であること)はまた、一切の図式的な手段方策の追及をとらないように用心すること、人間および人間社会の生活では二点間の直線が最も長い線になるかも知れないことを知り、社会主義的現実への真の途は、たんに自分が知らないこと、知るべくもないこと、予期しないこと予期すべくもないことから生ずるかもしれないことを理解すること、いかなるときもできる限りその途を目ざして活動的に生活することを意味する。 p.83

彼が心に抱いているのは、結局**革命的保守**、すなわち保存する価値のある、また新たな建設に役立つ、社会的存在の諸要素を革命的に選択することである。 p.84

彼が革命と呼ぶ長期にわたる**解放闘争**は、「革命ではなくして**再生を意味する精神**がわれわれをとらえる」とき、はじめてその成果を結ぶことができる。 p.85

「ユートピアは、もちろんそれが語ることよりも語る仕方において極度に美しいものであるけれども、革命が達成するところのもの、まさしくその終局は、前から存在したものと大してちがわないのである。」 p.85

革命の力は反乱と否定のうちであり、革命はその政治的手段をもってしては社会問題を解決することはできない。 p.85

「やがて人びとは(中略)すべての社会主義者の中でもっとも偉大な社会主義者のプルードンが、よし今日は忘れられているにせよ、無比なことばで明言したこと、すなわち**社会革命は政治革命**となんら類似するところがないこと、**社会革命は多種多様の政治的革命的革命なしには活発にはならないし、また持続もできないが、しかしそれは平和的建設であり、新しい精神からの、また新しい精神の組織化**であって、それ以外の何ものでもないことを、今よりもはっきりと知る時が来るであろう。」 p.87

すなわち真の「社会変革は愛と労働と平静のうちのみ到来することができる。」 p.87

したがって、人びとが制度を準備し、そのための地ならしとしての革命を成就するためには、「**解放せらるべき精神**がこの準備のために十分な度合いにまで彼らのうちにすでに生きていなければならないことは明白である。 p.87

政治革命が社会革命に役立つためには三つのことが必要である。 p.88

1. 革命家たちは**土地**を解放して手持ちの共同財産となし、ついでその共同財産の上に諸社会の連合体を完成することを固く欲しなければならない
2. 共同財産は、**土地解放**のちそうした完成がなされるように制度として準備されなければならない
3. この準備は**真の共同体精神**において行わなければならない

人はこの**共同精神**を今日の如き時代、すなわち「精神の喪失およびそれとともに暴力の時代、精神の喪失およびその故に個々人の精神の強度な緊張の時代、個人主義およびその故に原子化と根を引きぬかれ

て塵と化した大衆との時代、精神を欠きまたその故に真理を欠く時代」に、呼び起こすことができるであろうか。現代は「頽廢の時代であり、またその故に過渡的時代」である。現代がそうであるが故に、現代、まさしく現代においてこそこの精神の出現が切望されるのである。かくのごとき切望こそは革命である。しかし精神にその場所をしつらえるのは現実である。 p.90

「(前略)われわれを途に就かせるものは精神ではなく、われわれの歩む途がわれわれのうちに精神を生み出すのである。」 p.90

これらの人々のうちに活動する精神は、かれらをその共通の途にせきたてる。そしてこの途において、この途においてのみ、精神は新しい共同精神となることができる。 p.91

生きた精神によってのみ移住地は実現され、それなくしては幻影でしかない。しかし精神がそこに生きているならば、精神はそこから世界に吹きわたり、精神なくしては空の容器、目標のない目的制度でしかないすべての協力および結合の機関に浸透することができる。 p.91

社会主義とは、とランダウアーはいつている(1915年)、「人々の共同生活を共同精神に基づく自由な結合に、すなわち宗教に持っていこうとする企図」である。これはおそらく、現在のあらゆる宗教的象徴や宗教的信条を絶えず拒否したランダウアーが、「宗教」という言葉を積極的なまた結合的な意味で語った唯一の箇所であろう。——それは、彼が熱望するもの、すなわち共同精神にもとづく自由な結合を表現するものとして用いられている。 p.91

「社会主義の闘いとは土地のための闘いである。」 p.92

ランダウアーは決して絶対的な目標を認めず、ただ「われわれが、将来に眼を注ぐ限りにおいて」最初に追求しようとするものを認めるにすぎない。真の社会主義はすべて相対的である。 p.94

社会主義は決して絶対的なものではありえない。社会主義とは、時々与えられた条件の下で、その時々意欲され実行されるところのものの度合いと形態に応じて、人類のうちにその時々人間の共同社会が生成されることである。固定化はすべての実現を脅かすものである。 p.94

真の社会主義は更新の力を守り育てる。 p.94

## 7. 実験

「現実の」人間は、彼がそれまでやりぬく力がなかった、あるいはないと信じていた任務を遂行することを期待されるときにこそ、「理想の」人間にいつそう近づくのである。——「より高い目的とともに成長する」、あるいはむしろ成長することができるということが真実であるのは、個人だけについてではない。そして結局は、目標と目標に対する意識および意志にかかっているのである。 p.97

この資本と労働との結合が、現在は「資本が労働者を動物のように売買する」ことによって行われている。労働者自身こそ真の結合すなわち「自然的団結」をもたらさるのであるが、ただ彼らはそれを知らない。彼らは、団結し、協力し、共同の資本をつくり、独立するときのみ、それをなすことができる。 p.100

協同組合の基本的原則は、キングにとっては人間と人間との間の真の関係を確立することである。 p.101

「われわれは窮乏から身を救いだすために、何をするができるだろうか。」彼らのなかには、各自が自分でやり始めなければならないと考えた若干の人々もいた。これはつねに、またあらゆる場合に正しいことである。なぜなら自分でやりはじめることなくしては何事も成就されえないからである。 p.102

すなわち「実行する」というのはここで実行することであり、危険を前にして逃げるのではなく、自己の力をもって危険に立ち向かうことである。 p.103

ウィリアム・キングの計画のうちには、不断に拡大し結合する小さな社会主義の現実を形成することによって、大きな社会主義の現実<sup>に到達しようとする傾向が明らかに認められる。</sup> p.106

連帯の精神は、人びとの間に生きた関係が保たれている限りにおいてのみ、真に生きていることができる。 p.108

ドグマが支配するところではただ移住地の孤立しか生まれない。 p.120

もしも強力な生命および運命の大波に支えられた教育の力が、共同体感情と共同体意志につきまとう利己心に対する永続的な勝利を保証し、あるいはむしろそれによって利己心をより高い形態にまで高めることができるならば、こうしたことはすべて決定的ではなかったであろう。しかし普通にはただ集団的利己心、善意の利己心がある程度個人的利己心にかわって現れている。 p.120

そして個人的利己心がときに協同組合の内部的団結を脅かすように、しばしばドグマと混和した集団的利己心は協同組合相互の間や協同組合と一般社会との間に真の共同社会的関係がうち建てられるのを妨げている。 p.120

移住地は、まさしくそれが宗教の代用物の燃焼ではなく真の宗教的精神の高揚の表現として発生し、その存在を神の国の開始と見たところこそ一般にその持続力を実証したのである。 p.121

根本的に重要なのは連合自体であって、集団の相互補足、相互協力、集団の間を流れながら勢を加えて行く共同生活の流れである。だがそれに劣らず重要なのは移住地が、別種の関係であるにせよ、一般社会と何らかの関係を持つことである。 p.122

真の共同生活はもろもろの機能の縮小や分離ではなく、その充実と相互の働き合いを意味する。しかしそれにはクロポトキンが規定したと見られるように「町みずからをコミュニンにかえる」のでは足りない。(中略)町は村落と真に実りある交渉に入るためには、みずからを編成し、協同組合の一連合体に建てなおさなければならない。 p.123

有機的な構造的更新の原理が決定的となるためには、生産と消費とが結合され、生産では工業が農業によって補足される完全協同組合の影響が必要である。 p.129

完全協同組合がそのまま新しい社会の細胞となるまでには、どれほど長くかかるにしても、それがただちに、相互に結合した磁気的な活動中心の広範な複合体として建設されることが、根本的に重要である。 p.129

だがそれには、これまで百年以上にわたる歳月の間に現れた孤立的な、またその本質全体からして孤立を運命づけられた実験のかわりに、地域的に計画されながら連合体を建設し、ドグマ的固定がなく、多様な社会的形成を互いに認め、しかも常に全体を、新しい有機的な全体を指向するところの包括的な移住地の関連体が出現することが必要である。 p.130

## 8. マルクスと社会の更新

国家を社会に、それも変装した国家ではない「真の」社会に、できるだけ広い範囲にわたってとりかえること、これがいわゆるユートピア社会主義の目標であることをわれわれは知った。 p.131

真の社会の前提は次のように約言することができよう。すなわちそれは内面的につながりのない個々人の集合ではありえない。なぜならばそのような集合は、やはりまたたんに「政治的」原理、すなわち支配と強制の原理によって結合を保ちうるにすぎないからである。真の社会は、共同体的な生活を基礎とする小社会と、これら小社会の連合体とから構成されなければならない。そして各小社会の成員相互の関係も小社会と連合体との間の関係も、ともにできるだけ広範囲に社会的原理、すなわち内面的つながり、協力および互助の原理によって規定されなければならない。いいかえれば、構造的に豊かな社会のみが国家の後を継ぐことができるであろう。 p.131

本質的なことは、まさに真の社会そのものの建設が、一部はすでに存在しながら形態と意義とを更新しつつある社会から、一部は新たに形成せらるべき社会からなされることである。 p.132

「ユートピア」社会主義はある特殊の意味で局地的社会主義とよぶことができる。それは「非地域的」ではなく、むしろ時々と与えられた場所でまた与えられた条件の下に、したがって「ここできま」、ここできま可能な限度において実現されるであろう。 p.133

しかし局地的実現は、「ユートピア」社会主義にとっては**出発点**、「端緒」以外のものではなく、より大規模な実現が結びつくために存在しなければならないもの、この実現が自由と勢力を闘い取るために存在しなければならないもの、新しい社会がそれからすなわちあらゆる細胞とそれら細胞に似た姿で成立しているものとから建設されるために存在しなければならないものでしかない。 p.133 - p.134

マルクス主義運動は、その強大な勢力にもかかわらず、革命によって解放せらるべき**人間の新しい社会的存在**を形成することに着手していないのである。 p.161

## 9. レーニンと社会の更新

社会主義の理念は、マルクスにおいてもまたレーニンにおいても、共同の生活と共同の労働によって内面的に結ばれた小さな諸社会とそれら小社会の連合とから成る新社会の有機的建設を目指している。しかるにマルクスにおいてもレーニンにおいても、それが明確かつ統一的な行動方針とはなっていない。両者ともに、**再建の分散主義的要素が革命戦略の中央集権主義的要素**におしのけられている。 p.163

そこに欠けているのは、その集中化された行動からの要求とそれを害せず可能な分散化された社会を形成する仕事との間に、思想の実践が要求するものと思想自体が要求するものとの間に、革命戦略の要求と生成する社会主義的生活の権利との間に、**時々境界線を引くこと**である。 p.163

レーニンが相続したのは、分裂した精神的遺産、すなわち**社会主義的生命力を欠く社会主義的革命戦略**であった。 p.168

行動の本来的問題をレーニンは**弁証法**の定式で簡単に片づけている。「国家が存在する間はいかなる自由も存在しない。自由が存在するときには、もはやいかなる国家も存在しないであろう。」ここでは**弁証法**が本質的な課題、すなわち今日実現することが可能であり、また実現してしかるべき自由の最大限がいかなるものであるか、今日なおどれほど「国家」が必要であるかを日々吟味し、そしてたえず实际的結論を引き出すという課題をおおいかくしている。 p.170

人間がいまのままである間は、おそらく全くの自由など決して存在しないであろうし、まさにその間は「**国家**」すなわち**強制**が存在するであろう。しかし問題は日常のことである。すなわち国家が必要**避くべからざる**限度以上でなく、自由が許される限度以下ではないことが問題なのである。そして**自由**とは社会的に見れば、何よりも**共同社会への自由**、**国家の強制**から独立した**共同社会への自由**を意味するのである。 p.170

**権力**は、対抗権力が強要しない限り、退きはしない。 p.171

だが、人間的現実<sup>そうおう</sup>に相応する課題としてはむしろすべての**管理機能**を時々可能な限り広範囲に**非政治化**すること、すなわちこれら機能が権力の集積に変質する可能性をとりさることであろう。もはや管理

者だけが存在し、いかなる被管理者も存在しないことが問題なのではない。——(レーニンの考えを批判して)これこそどんなユートピアにもましてユートピア的である。——問題はむしろ管理がどこまでも管理としてとどまり、それが**支配**にならないこと、もっと正確に言えば、**管理**が時々<sup>の</sup>事情によって無条件に必要とされる(その決定はもちろん支配者自身の仕事ではありえない)以上の**支配**的要素を取り入れないことである。 p.171 – p.172

その晩年にはレーニン自身の口から次の痛烈なことばが語られている。「われわれは**官僚制的ユートピア**となってしまった。」 p.173

「われわれは**地方分権主義者、連合主義者、自治主義者**でなければならない。だが、**革命行動**の要求から、主たる任務が**中央**に移される時も存在する。しかしわれわれは革命行動の要求がその**実質のおよび時間的な限界**を越えないように注意しなければならない」(レーニンの言葉をブーバーが言いかえたもの) p.178 – p.179

われわれはもちろん**社会主義**がどのようなものになるかを「知る」ことなどできない。しかし**社会主義**がどのようなものになることをわれわれが欲しているかは知ることができる。そしてこのような知識、このような意志、このような**意識的意志**はそれ自体同時に生成に影響する。——人が中央集権主義者であれば、その中央集権主義が同時に生成に影響する。歴史のうちには、その勢力関係は異なるにせよ、常に**中央集権主義的發展傾向と地方分権主義的發展傾向とが並存**している。そこに生ずる結果によって本質的に重要なことは、**意識的意志**がその時々<sup>に</sup>獲得した力をもって、これら二つの傾向のいずれに味方にするかを宣明することである。——そして**権力を与えられた意志**が中央集権主義から解放されること以上に困難な、また稀有なことはおそらくあるまい。**中央集権主義的意志**が、みずから利用する社会構成体のうちに潜在するところの**地方分権主義的諸要素**を認めまいとすること以上に当然な、また論理的なことがあるか。 p.187 – p.188

十月革命は、社会秩序および社会成層、社会形態および制度に決定的な変化を実現したという意味でのみ、社会革命であった。しかし**真の社会革命**はそれだけではなく、さらに国家に対抗して**社会の権利を確立**しなければならない。 p.191

「**プロレタリアートの独裁**」は事実上社会にたいする国家の独裁、依然この方途に社会革命の完成を期待する圧倒的多数の人民が賛成しもしくは甘受するところの独裁である。レーニンにとってまさに廃止することが問題であったために、彼の悩みであった**官僚主義**——「**コミュン国家**」は彼にとって全く非官僚制国家であった——は、**政治的原理の独占的支配に必然的に伴う現象**でしかないのである。 p.193

こうしたことはすべての政治革命にはあてはまるかも知れないが、しかし歴史上初めてかくも大規模に社会的変革の要素がつけ加わったときには、人類すなわち事件の当事的たる国民とともにその目撃者たる諸国民が、あらゆる実験と動揺のうちにも未来の明らかな告知を、**社会主義的現存すなわち自由な共同社会**への動きについての明らかな告知を知ろうと渴望するものであることを彼(レーニン)は見落とし

た。ロシア革命においては、他にかつて未聞の何事かが起ったにしても、この種のことは出現しなかった。 p.194

ロバート・オウエンとともに始まる「ユートピスト」たちが、彼らの組合思想や計画について問題にしたことは、生活と労働とを共にする小さな独立的単位への人々の自発的な結合とそれら単位の諸共同体の共同体への自発的結集とであった。 p.199

レーニンがかかる思想および計画の実現と示しているのは、これと全く逆のものであり、国営生産所と国営配給所の巨大な、嚴重に中央集権化された複合体、たがいに歯車のようにかみ合わされ、官僚制的に管理された生産および消費の機関から成るメカニズムである。自発性や自由な統合などもはや存在する余地がなく、それを夢見る可能性すらもない。——夢の「実現」とともに彼は夢見ることをやめた。 p.199 – p.200

人間歴史のあらゆる時代を通じて、つねに協同組合とその原型は国家とその原型の有効権力が残しておく隙間においてのみ真に発展することができた。隙間のない国家はその本質上協同組合の現実の発展を排除するのである。 p.201

人は、個々の有機体の場合と同じように、社会有機体においても、それを余すところなくかつ全能の力をもって目的のための手段として利用するとき、その生命の神髄を奪い去らざるをえないのである。 p.206

最も優秀な農業理論家の一人はその目標をこう規定した。土地の耕作は、と彼はいった、国家経済がすべての農業アルテルにとって代わり、土地、生産手段および家畜もまた中央集権国家の所有に帰するとき、初めて社会化されたと見なされるであろう。そのとき農民は、国家の賃銀労働者として共同家屋に、広く電化された市域の中心たる大農業都市に居住することになるであろう。このような観念を一部に含む願望像は、決定的にかつ残りなく非構造化された社会の像である。それどころかそれは社会を食い尽くした国家の像である。 p.207

ソヴェト制度は、経済的技術的には大きな成果をあげたし、戦争技術的には一層大きなことを成しとげた。市民は概して種々の理由からこの制度を消極的または積極的に、擬制的または、現実的に肯定しているように見える。彼らの態度のうちには、見たところ、漠然とした諦めと実際の信頼とがいりまじっている。個人は思想と行動のわずかな自由しか保証しないこの制度に自己をまかせている、と一般にはおそらくいうことができるであろう。どのような逆戻りも存在しないし、また少なくとも技術的能率においては進歩が存在するからである。しかしソヴェト制度が社会主義について実現したことを、囚われない眼で見る者には、これとちがった光景が見えてくる。社会主義への要請は多いけれども、社会主義の形態は皆無なのである。 p.207

「共産党宣言が語るかの『組合』はどのように見えるのか」と偉大な社会学者マックス・ウェーバーは1918年に質問した。「社会主義は、ひとたび権力を奪取し、それをいまや意のままに駆使するチャンスを実際に掌握したとき、社会主義社会の**胚種細胞**としてとくに示す何をもっているのか。」このチャンスが社会主義の手に入った**農村**では、今日もはや他のいかなる場所にも存在しないところの**胚種細胞**が存在していたのに、それは成長せしめられなかったのである。 p.207 – p.208

社会主義という言葉が最初に用いたピエール・ルルー(サン・シモン派社会主義者 1797 – 1871)は、1848年フランスの国民議会で次のように演説した。「諸君がいかなる**人間的組合**<sup>ゲノッセンシャフト</sup>をも欲しないならば、あえて言うが、諸君は文明を恐ろしい苦悶のうちに死滅すべき運命にさらしているのである。」 p.208

## 10. もう一つの実験

高度資本主義の時代は、すでに見たように、社会の構造を破壊した。 p.209

資本主義に先立つ社会は種々の社会から組み立てられており、それは**複合的多元的な構成体**であった。これによってその社会は、特殊の**社会的活力**を与えられ、革命前の中央集権国家の全体主義的傾向に抵抗することが可能となり、その多くの要素が**自治的生活**をはなはだしく弱められたときにもなおそうであった。 p.209

結社の固有権に反対するフランス革命の政策はこの抵抗を打ちこわした。それ以降**新しい高度資本主義的中央集権主義**は、古い中央集権主義がなしえなかったこと、すなわち**社会を原子化すること**に成功した。 p.209

機械およびその助けをえて社会を支配する資本は**個々の人間**のみを相手にしようとし、また**近代国家は自治的集団生活**をますます横奪することによってこれを援助した。 p.209

プロレタリアートが資本に対抗して建設した闘争組織、経済的組織である労働組合および政治的組織である**政党**は、その本質上この解体過程をはばむことはできない。 p.209

このことからして、協同組合運動の**客観的真髓**は、**社会の構造的更新**への、新しい構造学的形態における**内部的関連の奪還**への、新しい consociatio consociationum(諸組合の組合)への傾向として認められるべきである。(中略)それは根本において**全く局地的**でありまた**建設的である**。すなわちそれは**与えられた条件のもとで与えられた手段をもって達成しうる改革**を考えるのである。そして心理的にはそれは、たとえ多くの場合抑圧され、それどころか麻痺せしめられているにしても、**人間の永遠の欲求**に、すなわち**人間がそこでくつろぎ、共に住む人びとが彼との出会い、彼との協働のうちに彼の固有の本質と生活を確認するところのより広大な建物のなかの一つの部屋として自己の住居を感じたいという欲求**に根ざしている。 p.210

共通の見解と共同の努力のみに基づく結合は、この欲求を満足せざることはできない。それは、共同の生活が築きあげる結合のみに可能である。 p.210

こうしたことについての意識から、総合的な形態すなわち**完全協同組合**が求められてくる。その最も有力な試みは生産と消費との結合の上に共同生活が建設される共同体村落である。そのさいわれわれは生産のもとに農作業だけでなく、さらに農業と工業および手工業との有機的結合をも理解しなければならない。 p.211

社会主義の課題は、新しい村落、種々の生産形態を結合し、生産と消費とを結びつける村落が、無定形化された都市社会に構造的更新の意味での影響をおよぼす程度に応じてはじめて実現されるであろう。(中略)しかし**現在の協同組合的村落**にもまた、都市社会に働きかけることのできる放射的な力がすでに潜んでいる。 p.212

**都市**を破壊しようとするなど、かつて機械を破壊しようとしたことがそうであったように、ロマンチックであり、ユートピア的であろう。しかし**都市**を技術の発達との密接な関連の下に**有機的に組成し、小単位の集合**に変えることは建設的であり**局地的**である。今日すでに多くの国々で重要な意味をもつその芽生えが存在するのである。 p.212

私が過去の歴史と現在とを見わたした限りでは、完全協同組合を創設しようとしたただ一つの包括的な企てに、社会主義的意味におけるある程度の成功を認めることができよう。それはパレスチナにおけるユダヤ人の種々の形態の協同組合村である。この協同組合村にもたしかに**内部の関係、連合および一般社会に対する影響**という三つの領域すべてにおいて深刻な問題がつきまどってきた。しかしそれは、そしてそれだけが、これら三つの領域にわたって生きた存在であることを示した。 p.212-p.213

ここに、またここだけに、生成し行く自覚的な**共同体器官**が発生した。この器官は敏感の余りたえず絶望に陥られるけれども、それはより高い希望、すなわち絶望の土上にのみ成長し、またもはや感情ではなくしてただ働くことを意味するより高い希望をかきたてるため、感情的な希望をうちこわすところの絶望である。 p.213

個々人のゆるい集合ではその本質からして与えられた条件の下では成し遂げえないこと、それどころかそうした条件の下では本質上試みえないこと、それをこの集団は敢行し、試み、成就したのである。 p.214

たがいわゆる**イデオロギー**——私は古いけれどもすたれない理想という言葉でよぶ方を好むが——は、たんに後からつけ加えられる何か、つくりあげられた事実を根拠づける何かではない p.214

決定的なことは、この理念的な動機がゆるやかで柔軟な性格をほとんど例外なく保持したことである。多くの様々な将来への**夢**も存在した。人びとは前途に新しい包括的な家族形態を見た。人びとはみずか

らを労働運動の前衛、それどころか社会主義の直接の実現者、新しい社会の原型と見た。人びとは新しい人間と新しい世界の形成を目標とした。 p.214 – p.215

しかしこれらのうちどれ一つとして固い出来上がった綱領に硬化されはしなかった。人びとは、協同組合的移住地の歴史ではどこでもそうであったように、具体的な事情によって変更することは許されないで、ただ記入するだけでしかないような図式を持参しなかった。理想は刺戟を与えたが、いかなるドグマをも生み出さなかった。それは鼓舞激励はしたが、命令はしなかった。 p.215

何よりも重要なのは(中略)パレスチナの事態の背後に一つの歴史的事情(中略)が存在したことであり、またこの歴史的事情が、あらゆる階級のなかから「ハルツィーム」すなわち**開拓者たるエリート**を呼び集め、そして階級を超越させたことである。**このエリートに適した生活形態が共同体村**なのであった。  
p.215

「**開拓者精神**」はあらゆる点で**新しい変革された民族共同体の生成**に関連付けられた。それは、自己満足におちいるやいなや、自らの精神を放棄したであろう。 p.215 – p.216

民衆の生活、とりわけ歴史的危機のうちに立つ民衆の生活においては、そこに真の、すなわち中心的な職能に召された、**非篡奪的なエリート**が出現しているかどうか、次にこれらエリートが**社会に対する自己の使命**を忠実に守り、社会にたいする関係の代わりに自己自身にたいする関係をうち立てないかどうか、さいごに彼らがその**使命**にふさわしい仕方で補充され、**更新**されていくことができるかどうか、こうしたことこそは決定的な意味をもつのである。 p.217

すなわち**エリート**がその後に自然につづくものに強く影響することができ、かくして**後進者**は、どんな困難な問題であっても、**エリート**の仕事を適切につづけて行くかどうか、またできるだけ**すべての適格な分子**が加わり、それ以外の者はできるだけ加わらないような**正しい選抜と正しい訓練**とによって**精神的後継者**を立てるか、あるいは不適格者の参加がさけられない場合には**正しい教育的な影響**によって調整がなされるかどうかということである。 p.217

共同体の全責任を引き受けている人びととどこかで責任を回避している人びとの間の**内的緊張**は、最も奥深いところからのみ克服されることができる。 p.217 – p.218

問題が起こる点は、理念にたいする関係でもなければ社会にたいする関係でもなく、また労働にたいする関係でもない。こうした点ではどこでも、半開拓者たちもまた自制し、全力を尽くし期待されたことを大体実行した。問題が持ちあがる点、人びとが「つまづく」点は、**仲間との関係**である。 p.218

私が考えているのは、共同体の大きさとは全く関係のないことである。親密さが問題ではない。——親密さはあるところにはあるし、ないところにはない。問題は**開放性**にある。真の共同体は、たえずいつしよに歩きまわる人びとから成ることを要しない。それは、まさに同志として互いのために心をうち開

けその用意をしている人びとから成立しなければならない。その存在のあらゆる点において潜在的に共同体の性格をもつものが**真の共同体**である。 p.218

かくして共同体の内部の社会的内部的問題は実際にはその**純粋性**、したがってまたその内的力とその持続性との問題である。 p.218

だがわれわれはこのきわめて重要な領域についてもまた、私がすでに指摘したあの容赦なく明敏な**集団的自己観察と自己批判**を見出すのである。しかしそれを正しく理解し評価するためには、人びとがかれらの共同体村の**最も内的な固有の本質**にたいしていただく比類なく積極的な、まさしく**信仰的な関係**といっしょに見なければならぬ。両者は同一の精神世界の二つの側面であり、どちらも他を欠いては理解されないのである。 p.218 – p.219

かくして広い世界でのあらゆる社会的実験とは本質的に異なるものが生まれた。それは、各自が自己の問題と計画とをもってそれぞれ自己のために研究する実験室ではなく、**共同の土地**で様々な方法による様々な栽培が**共同の目標**に向かってたがいに試されている**実験畑**なのである。 p.220

様々な形態、家計や生活秩序や子供の教育に個人的な独立性を保持する半個人主義的形態から、純共産主義的形態にいたる様々な形態の分離や発展とともに、一つの団結に代わって一連の諸団結が成立し、それぞれにおいて一定の集落形態と多かれ少なかれ一定に人間タイプが互いに連合を結成し、そのさい各地域的グループが、個々のグループのなかで行われているのと同じ**共同性と相互扶助の原則**のもとに結合することが基本的前提であった。しかし**包括的統一**への傾向も決して消滅しなかった。 p.221

各部分集団がその**団結**のなかで**自己の特性**づくりあげかつ強めた。そしてそれぞれが**統一**を**自己の拡大**と考えるように傾いたのは当然のことではない。 p.222

このようなテンポで、このような**後退と幻滅と新たな冒険**とをもってこそ、人類の世界に**真の変革**が達成されるのである。 p.223

だが一定の前提と条件の下での企てが**ひとたび**ある程度成功したならば、ひとは他の、それほど好都合でない前提と条件の下でも、その企てを変えて着手することができるのである。 p.223

最近の戦争を**世界危機への序曲の終わり**と見ねばならぬことにはもはやほとんど疑問の余地はない。  
p.223

それらはただちに根本的な社会化の必要、とりわけ**土地収用**の必要に直面するであろう。そのとき、誰が変革された経済の真の主体となり、社会的生産手段の持ち主となるか、最高度に中央集権化された国家の中央権力か、それとも**共同に生活し共同に生産する農村および都市の労働者とその代表団体との社会単位**か、これが全く決定的に重要となるであろう。この後者の場合には改造された**国家機関**はただ調

整と管理の機能を営むだけになるであろう。より大きな国でも後で次第にこれにならうであろう。この決定にこそ、新しい社会と新しい文化との生成が広くかかっている。 p.224

次の原則についての決定が問題なのである。すなわち諸連合の連合としての社会の構造的更新と国家の統一機能の縮小か、それとも全能国家による無定形社会の吸収か、社会主義的多元主義か、それとも「社会主義的」中央集権主義か、変化する条件によって日々新たに吟味される集団的自由と全体秩序との正しい釣合か、それともいわゆる「ひとりでに」やってくる自由の領域のために不定期間強いらられる絶対的秩序か。 p.224

## 11. 世界危機のさ中で

ここ三十年来われわれは、**人類史上最大の危機**の発端に生活していることを感じている。近年の驚くべきもろもろの出来事もまたこの**危機の兆候**としてのみ理解されうることが、われわれにいよいよ明らかになっている。 p.225

すべてのシステムが、古いものも新しいものもひとしくこの危機の中にまきこまれている。 p.225

危機をとおして問われているのは、まさしく世界における人間の存在一般に他ならない。 p.225

われわれに測り知られぬ遠い昔に、「人間」という被造物が旅にのぼった。——それは、自然から見れば全くほとんど理解できない異常事であり、精神から見れば同じように理解しがたい、おそらくはただ一回的な化身であり、これら二つの面からみても、その本質からしてあらゆる瞬間に外からも内からもきわめて強烈に脅かされ、いよいよ深刻さを加える危機にさらされている存在である。 p.225

この世の旅をつづける間に人間は、いうところの自然を支配する力なるものをいよいよ多く、またいよいよ速いテンポで高め、またいうところの精神の創造なるものを勝利から勝利へと導いた。しかしそれと同時に人間は、相次ぐ危機によって一切の栄光がいかにもろいものであるかをいよいよ深く感ずるようになり、また最もよく先が見える時には、人類の進歩とよびなれているすべての事柄にもかかわらず、人間は平坦な道をたどっているのでは全くなく、つねに深淵の間の狭い尾根を一步一步歩んで行かなければならぬことを理解するようになった。 p.225 – p.226

危機が重大になればなるほど、いっそう真剣な、いっそう責任を自覚した認識がわれわれに要求されるのである。なぜならば、たしかに行動が問題ではあるけれども、認識のうちに浄化された行動のみが、危機の克服に寄与するであろうからである。 p.226

人間がいつかしだいに自然から抜け出し、また自然的存在としての弱さにもかかわらず、自然にたいして自己を主張するにいたったゆえんのとりわけ本質的な事柄、しかも特別に作られた事物から「技術的」世界を形成したことにもまして本質的な事柄は、人間が防御や狩猟、食糧採取や労働のために仲間

と団結したことであり、しかもそのさいある程度は最初からすでにその後はますます多くの度合いにおいて他の一人一人を独立の存在として認め、そのようにして互いに理解し合い、語りかけたり話しかけられたりしたことである。 p.226

互いに同時に依存しかつ独立する人々からのこのような「社会的」世界の形成こそは、動物における類似のあらゆる営みとは類を異にし、それはちょうど人間の技術的労働が動物における類似のあらゆる動きとは類を異にするのと同じである。 p.226 – p.227

多くの昆虫もまた厳密に分業的に建設された社会をなして生活をしている。(中略)そこには臨機の処置やごく僅かな度合いにもせよ相互の独立や、つねに互いに「自由に」観察する能力や、したがって人間対人間の如き関係は存在しない。 p.227

人間特有の技術的創造が事物に独立性を与えることを意味するように、人間特有の社会的創造は人間の存在に独立性を与えることを意味する。 p.227

人類自体のこれまでの発展においてもこの進路、すなわち増大しゆく個人的独立とこれを基礎とする相互的認知および協力とからなる共同社会の形成および改造への進路が有力に行われている。 p.227

それ以来、真の人間の社会が発展したところではどこでも、それ(重要な歩み)は機能的独立、相互的尊重、および相互的責任——個人的および集団的な——という同じ基礎の上に生じた。 p.228

なるほど共同の秩序と安全を組織化し保証する様々な種類の権力中心が分立した。しかし狭い意味の政治的領域すなわちその警察権力と官僚機構を備えた国家にたいしは、有機的機能的に組成された社会、多種多様の諸社会から構成された社会が対立しており、この社会の中で人々は生活し生産し、また相争ったり助け合ったりした。 p.228

この社会を構成する大小様々な社会の一つ一つのなかで、これら共同体および協同組合の一つ一つのなかで人間個人はあらゆる困難や争いにもかかわらず、氏族におけるのと同じように、自己の固有の機能的独立と責任が認められ確認されることを感じたのである。 p.228

このことは、中央集権主義の政治的原理が、分権主義の社会的原理を従属せしめる度合につれて変化した。そのさい決定的なことは、国家とくに多かれ少かれ全体主義的な形態の国家が自由な結合をますます弱め押しのかたことではなく、むしろ政治的原理がその中央集権主義の極印をもって自由な結合のなかに侵入し、その構造および内部生活を一変し、かくして社会そのものをますます政治化したことである。このようにして社会が国家に同化されることを要求したのは、秩序づけられた混乱をとまなう現在の経済発展や、原料獲得および世界市場への地歩拡大のための万人の万人に対する闘争の結果として、国家間の古い対立に代わって社会自身の間の対立が出現したという事情である。 p.228 – p.229

もはやたんに隣人の侵略心によってではなく、さらに一般事態によっても脅威を感じている個々の社会は、集中化された権力の原理に完全に屈従する以外にいかなる救いをも知らない。この原理を自己の原理となしている点では、民主主義的形態の社会においても全体主義的形態の社会におけるとさして異なるところはない。いたるところで問題とされたのは、ただ隙間のない力の組織、スローガンへの疑いのない信従、全社会による現実的もしくは想像上の国家的利益の遂行であった。 p.229

ただ確実に機能する経済・国家装置によってたんにうわべをおおいかくしている現代生活の大きな混乱のなかにあつて、個人は集合体にしがみついている。個人が身を埋めていた小さな共同体は彼を助けることができない。彼の考えではそれができるのは大きな集合体だけである。 p.229

個人はあまりにも喜んで個人的責任を取り上げさせる。彼はただ服従しようとする。そしてそのために最も貴重な善たる人間と人間との間の生活が失われる。自律的な関係は無意味なものとなり、人格的關係は干からび、精神自体も一職員として雇用される。人間個人は共同社会の身体の生きた部分から「集合体」という機械の歯車となる。 p.229 – p.230

人間は、変質した技術のなかで労作の感情と節度の感情をまさに失おうとしているが、それと同様に、変質した社会生活において共同社会の感情を失おうとし、しかもまさに一方では自己の共同社会への全き献身のうちに生活しているという幻想にみたされている。 p.230

この種の危機に人間がうち勝つことができるのは、その旅路の初めの地点にもどることによってではなく、ただ与えられた問題を割引せずに解決することによってである。われわれには逆戻りはなく、ただつき抜けることしかない。たがわれわれは自分たちがどこへ行こうと欲しているかを知るときのみ、つき抜けることができるであろう。 p.230

明らかにわれわれは、社会的原理に対する政治的原理の主権を奪い取るところの生きた平和を確立することから、はじめなければならない。そしてこの第一の目標は、いかなる政治的組織の考案によつても達せられないし、ただ地球全土を地域と原料と人口に応じて共同で耕作し管理しようという人類の強固な意志によつてのみ達せられるのである。ところがまさにこの点で、従前のあらゆる危機にまさる大きな危険、すなわちすべての自由な共同社会を食いつくすところの無制限な全世界的権力集中主義がさし迫っている。すべては、全世界を経営管理する仕事を政治的原理にゆだねないことにかかっている。 p.230 – p.231

共同経済は社会主義的経済としてのみ可能である。 p.231

だが代表とは何であろうか。結局、現代社会の最悪の欠陥は、まさに、人びとがあまりにも広範囲に自己を代表にまかせていることに存しないであろうか。 p.231

あらゆる歴史の根源的希望は真の、従って全的に共同体的な内容を含む人類共同社会を目ざしている。

p.232

内部的な決定的問題は原則的なあれかこれかの形のものではない。それは、正しいたえず引き直される限界線の問題、必然的に中央集権化すべき領域と自由にまかすべき領域、支配の度合と自治の度合、統一的な法と共同社会の要求との間に様々な限界線を設定する方式の問題である。中央権力の暴圧にたえずさらされている時々の事態にたいし共同社会の要求からする不断の検討、変化しつつある歴史的前提につれて変わる真の限界にたいする監視、これが人類の精神的良心の任務であり、比類なき最高審であり、生きた理念の誠実な代表であろう。 p.232 - p.233

理念の代表と私はいったが、それは固定した原理の代表ではなく、まさにこの地上の日常の材料において形づくられることを欲している生きた形態の代表のことである。また共同体はドグマ化されてはならない。またそれは、出現するときには概念ではなく状況を満足さすべきである。 p.233

共同体理念の実現は、他の理念の実現と同様に、一回限りに、かつ普遍的妥当的に行われるのではなく、つねにただ現下の問題にたいする現下の解答として行われなければならない。 p.233

この生きた意義をもつために、共同体思想から一切の感傷性、一切の極端化および狂熱を遠ざけなければならない。共同体は決して気分ではない。またそれは感情である場合にもつねに心構えの感情である。 p.233

共同体は、つましい「計算」や逆う「偶然事」や襲いかかる「不安」を知りかつ内に含むところの共同生活の内的心構えである。それは困苦の共同でありまたそれ故にこそはじめて精神の共同である。それは努力の共同でありまたそれ故にこそはじめて救済の共同である。 p.233

また精神を彼らの主とよび、救済を彼らの約束の地とよぶところのかの共同体すなわち「宗教的」共同体は、みずからがえらんだのではなく、むしろそこへまさしくつかわされたところの現実、えられもほめたたえられもさえないあるがままの現実において彼らの主に仕えるときにのみ共同体である。それは、この道もない時代の藪を通してその約束の地に向って道を拓くときにのみ共同体である。たしかに「仕事」が重要なのではない。重要なのは信仰からの仕事である。信仰の共同体は、仕事の共同体であるときにのみ真実のものである。 p.233 - 234

たしかに共同体の真の本質は、それが一つの中心をもつという——顕在もしくは潜在の——事実に見出されるべきである。 p.234

たしかに共同体の真の成立は、その成員が中心に対して共通の、他のあらゆる関係に優越する関係を有することから理解されるべきである。(中略)そして中心の本源性は、それが神的なもののうちに明示されたものとして認められないときには、おそらく知ることができない。しかし、この中心は、それがより現世的に、より人間的に、より愛着的に示されていればいるほど、より真実であり、より明瞭であ

る。「社会的なもの」もこの中心の一つである。それはその部分としてではなく、確証の世界としてである。すなわちこの世界にこそ中心の真理が示されるのである。 p.234

だが共同体は決して「建設」されることを要しない。歴史的運命が一群の人びとを共同の自然および生活の環境においた処、そこが真に共同体が生成する場所であった。そして市民が、言葉にいい表わせないものの周りに、またそれを通して結びつけられていることを知っていたときには、中央に都市の神のいかなる祭壇をも必要としなかった。生きたそしてたえず更新される共同生活がすでに行われており、それはただあらゆる関係の直接性のうちにさらに完成されることを欲した。 p.235

共同体の問題は共同で——最も好都合な場合には代表者によってではなく広場での集会において——協議され決定された。そして公共の事柄について経験された結合がそれぞれの個人的接触のうちに放射した。隔離の危険も脅かしはしたであろう。しかし精神はその危険をはらいのけた。精神はここでは他のいかなる場所にまして旺盛であり、民衆、人類、宇宙を目ざしてその大きな窓を狭い壁に切り開いたのである。 p.235

芸術よりも労働が、政治よりもスポーツが人びとを相互に結びつけており、日時も精神もきちんと分割されている。だがそうした結合はまさに実質的であり、人びとは共通の利益や傾向にいっしょにしたがい、「直接性」にはなにの用もない。集合体はなんらうちとけたいいっしょの集まりではなく、むしろ経済的および政治的な力の大きな結合である。それはロマンチックな創造の働きには不毛であるけれども、数量的にとらえることができ、活動や作用として外に現れる。個人は親密さを欠きながらもその精力を尽くしての貢献を意識してこれに所属しなければならない。この不可避的な発展に反抗するいかなる「団結」も消滅せざるをえない。 p.235 -p.236

正しい認識(前提)と不合理な結論とのこの混交に直面しながらも私は<sup>ゲマインデ</sup>共同体の再生を信ずるものである。回復ではなく再生を。共同体は事実上回復さるべくもない。 p.236

よし貸長屋での近隣どうしのあらゆるささやかな助け合い、最高度に合理化された工場の休憩時間における新しい交わりのあらゆる高まりが、世界の共同体的内容の増大を意味するかに思われるとしても、また時には正しく建設された村落共同体が議会にもまさる現実的なものとして私の心を引くことがあるとしても、共同体は回復さるべくもない。 p.236

しかしさし迫る社会変革の流れと精神とから共同体の再生が生起するかどうか。それによって人類の運命が決定されるように私には思われる。 p.236

有機的な自治共同体<sup>ゲマインヴェーゼン</sup>——そしてこれのみが形態づけられ組成された人類に適合することができるであろう——は、決して個々人からではなく、ただ小さな、またもっとも小さな共同体から建設されるであろう。民族は、共同体的内容を含む度合において共同体である。 p.236 - p.237

共同体の再生を語る時、私の念頭にあるのは、恒常的世界状態ではなくて、変革された世界状態である。新しい共同体<sup>ゲマインデ</sup>——ひとはこれを新しい協同体<sup>ゲノッセンシャフト</sup>ともよぶことができよう——によって私が考えるのは、変革された経済の主体すなわちその手に生産手段の機能が移される集合体である。くりかえしていえば、すべては、そのような集合体が準備されているか、また準備されるであろうかどうかにかかっている。 p.237

中央集権主義と地方分権化との関係は、さきにも述べたように、原理的に処理される問題ではなく、理念と現実との関係に関するすべての問題と同じように、多くの精神的機敏、正しい振合についてのつねにやっかいな考慮をもって処理されるべき問題である。しかし中央集権化は、時と所の条件によって必要とされる限度でのみ行われるべきである。その境界線を引いたり引きなおしたりする当事者が良心に目ざめているならば、権力ピラミッドの土台と頂点との関係は、みずから共産主義を称し、すなわちやはり共同社会を目指して努力していると称する諸国家において今日行われているのとは全くちがったものとなるであろう。 p.237 – p.238

私の考えている社会形態においてもまた代表制は存在しなければならないであろう。しかしそれは今日の制度のように、無定形な選挙民大衆の偽りの代表者ではなく、共同体の経営管理においてその手腕をよく試された代表者から成るであろう。被代表者は彼らの代表者と、今日のように空虚な抽象、政党綱領の独特の用語によってではなく、具体的に、共同の活動と共同の経験とによって結びついているであろう。 p.238

だがもっとも本質的なことは、共同体建設の過程が、共同体相互の関係にも一貫しなければならないことである。もろもろの共同体から成る共同体のみが、自治共同体の名に値するのである。 p.238

私がここに急いで素描した像の略図は、暴風雨がそれを開くまで、「ユートピア社会主義」の文書に積み重ねられたままにおかれるであろう。私は、新しい社会形態のマルクスの「孵化」を信じないと同じように、革命の胎内からのバクーニンの処女受胎をも信じない。しかし私は造形の時機における像と技倆<sup>ぎりょう</sup>との出会いを信じている。 p.238